

"街頭観察"を素材とした作文指導

著者	森 由紀
雑誌名	三重大学日本語学文学
巻	5
ページ	152-141
発行年	1994-05-29
URL	http://hdl.handle.net/10076/6473

“街頭観察”を素材とした作文指導

森 由 紀

1. はじめに

外国人を対象として日本語を指導する際に、筆者はかねてより、視覚教材の有用性（注1）に着目してきたが、“書き”の指導においても同様の発想が生かせるのではないかと考え、視覚的なテーマを素材として取り入れることによって作文指導を進めてみた。以下、本稿ではその実践報告を中心に今後へ向けての位置づけを行ってみたい。

注1) 野元千寿子・森由紀共著(1989年)『絵で教える日本語』凡人社刊
 森 由紀(1991年)『日本語教育における視覚教材』〔京都産業大学
 国際言語科学研究所における口頭発表〕

2. 作文クラスにおける視覚教材の役割と扱い方

一般的に、視覚教材の使用率は、初級段階には高く、その種類もレアリア、写真、絵カード、地図、スライド、OHPなど多岐にわたる。近年では、マルチメディア化の影響を受け、ビデオ、レーザー・ディスク、コンピュータ等（注2）を用いた実験的な試みも報告されるようになってきている。しかし、中・上級段階に移行するにつれて、それらの使用頻度は徐々に減少してしまうようである（注3）。また、会話クラスでの導入やドリルには積極的に利用されているのに、作文クラスとなるとさほどは活用されていないように見受けられる。もちろん取り扱うテーマにも関係してくることはあるし、闇雲に視聴覚に頼ることが常に効果的であるとは限らない。適切な段階で適切な教材をいかに使いこなしていくかがポイントになってくるであろう。

では、いかなる段階でいかなる教材を用いるのが適切といえるのだろうか。この点については、例えばナチュラル・アプローチの理論からは、‘i + 1’として指摘されてきたところである。作文指導に絞って考えれば、“読み書き”の枠にとらわれず、必要に応じて自由にメディアを示しつつ、学習者の到達レベルに配慮しながら“書き”へと導いていく工夫がもっと意識的になされてもよいのではないだろうか。ことに自由作文となると、国語教育の影響からか、とすれば個々の創造性を強調しすぎる傾向になりがちであるが、学習者に共通の材料を提供することによって、技術的な面でのバックアップをはか

(2)

ることが、少なくとも第二言語としての日本語習得を助ける者の大切な役割の一つといえよう。

具体的に例を示せば、ストーリー性のある絵をもとにして、会話をさせたり、絵の説明をさせたりという練習が主にコミュニケーション能力を養うために効果をもたらすとされているが、この方法を“書き”に利用してみるのもよいだろう。又、レベルに応じてより複雑に想を練らせたかったら、1枚だけではなく、3～5枚ぐらいの一連のつながりのある絵を順不同に提示し、各自がそれらの絵をもとにして、話の筋書きを作りあげて書くというのも学習者自ら楽しんで取り組める作業となろう。単独で筋を立てさせるには心細いというレベルであれば、書く前にグループごとに相談ないしディスカッションさせてから書かせると、より一層効果的である。

また、まとまった作文を書くほどの表現力はないが、単なる短文作りでは満足できないといった過渡的段階の学習者にたいしては、街で見かける標識や地図のマークなどを示して、どこかでみたことがあるか、どういう意味（だと思う）か、自国にも似たような形のマークがあるか、など思いつくことを書かせると、いわゆる生活作文とは違った内容である程度まとまった文を綴るきっかけとなるようだ。

そこで、次の項から、筆者が試みた実践の一つとして、“街頭観察”を取り入れた作文指導について紹介していきたい。

注2) コンピュータの助けを借りて教育を行うシステムはCAI (Computer Assisted/Aided Instruction) として様々な分野に広がりを見せているが、語学教育においては、言語学習目的を強調する立場から特にCAL (Computer Assisted Learning)より派生した流れとしてCALL (Computer Assisted Language Learning) という呼称も用いられている。さらにグラフィック機能やAI (人工知能) 機能に注目したICAI (Intelligent CAI) も重視されはじめている。

また、パソコン通信のネットワークを利用し、ネイティブの日本人学生との間で作文や手紙の交信をさせることによって、「書く力」を伸ばす教育を試みた例(中島1993)もある。

注3) 国立国語研究所・日本語教育教材開発室(1991)『視聴覚教材の利用に関するアンケート結果報告書』には、日本語学校・高専・大学の別で各種視聴覚教材の使用率が割り出されているが、絵カードについてみると、当然の結果ながら、最も使用頻度の高い機関は日本語学校であり、次いで大学、高専の順になっている。

3. “街頭観察”に重点を置いた作文指導

3. 1. 指導の指針

そもそも“街頭観察”に類似の学問的萌芽を探れば、柳田國男(1875～1962)にも遡ることができよう(注4)。より具体化された形で街頭や路上での風俗現象を採集し、「考現学」(モデルノロジオ)として確立させたのが、建築学者の今和次郎(1888～1973)である。『モデルノロジオ「考現学」』(1930・春陽堂刊、学陽書房より1986年に複製版あり)は、舞台装置家の吉田謙吉とともに編まれた書物であり、その中には、大正から昭和にかけて見受けられた風俗の断片が簡潔なイラストとともに採集、紹介されている。

時を経て、1976年、関西に発足した現代風俗研究会においては、会員による「はがき報告」を通して身近な風俗の移り変わりが観察され、'77～'86の十年間の成果がまとめられている(1987・鶴見編著)。

注4) ただし、柳田自身は、昭和16年当時、『婦人公論』誌上において、民俗学と考現学の違いを問われて、前者の方が「主として其原因の國の歴史の中に在るものを探らうとする」のに対し、後者は「兎に角に何が原因であらうともすべて探って…(中略)…理想はおしまひにすべての解説を総合せんとして居ると思はれます」と答えている。そのため、民俗学の方が自ずと入口が狭くなるかわり、奥が深いとも説いている(「女性生活史」：筑摩書房刊『定本柳田國男集第30巻』所収)。

3. 2. 指導対象について

本稿において扱う対象者は、立命館大学(主として国際関係学部所属)の短期留学生で、大半が欧米系の学習者(注5)である。このプログラムは、約一年間で修了するもので、One Year Program と呼ばれる。例年5月にスタートし、翌年の1月末までを区切りとするコース(注6)である。

短期留学生向けのクラスは全部で13コマある。そのうちのどれを履修するかは、オリエンテーションの際に個別に面接を行い、教師からアドバイスが与えられる。また、レベルの高い学生は、正規留学生向けのクラスや時には専門の講義を聴講することが認められる。近年、留学者数が増加するに従って、さまざまなバックグラウンドをもつ学生が参加してくるようになり、一層きめ細かな対応が求められるようになってきたと言える。

注5) ごく稀に大学院の研究生や正規留学生として入学内定済みの学生——1992年度後期の例では、タイの学生等一が補習のため参加してくる場合もある。また、サマープログラム(Kyoto Summer Language Program

(4)

以下、KSLPと略)参加の学生で、比較的能力の高い学習者にも、レベルに応じたクラスに限り出席を許している。

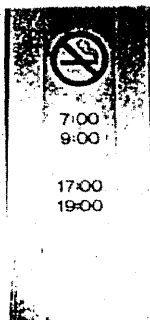
注6) 1994年度からはセメスター制が実施され、半年毎に開始時期が設けられる。このため、アメリカ・カナダ・ヨーロッパ等の国々から来日する学生にとっては後期(9月末)から参加することが可能になる。
ちなみにオーストラリアの学生は従来通り5月からの参加が見込まれる。

3. 3. 指導の実際

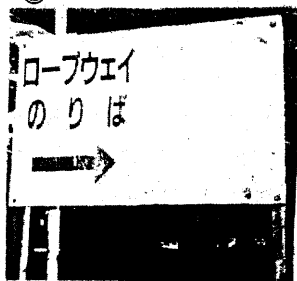
“街頭観察”というテーマを課題として与えたのは、1992年および1993年の夏休みの宿題としてであった。休みの始まる前の授業で、予め、休みに外出しないし旅行した先で見かけた気になるものをカメラにおさめ、その出来上がった写真をもとに作文(四百字詰め原稿用紙2、3枚以上)を仕上げてくるという趣旨を説明した。それとともに、実際に、日本の街角で目にすることのできる風景や標識、看板、等の写っているサンプル(筆者の写したもの他、KSLPの学生が撮影したプリントも含まれている)を見せ、それらの写真についての意見を交換させた(写真資料①～③は筆者、④⑤はKSLPの学生による)。

写真資料

①



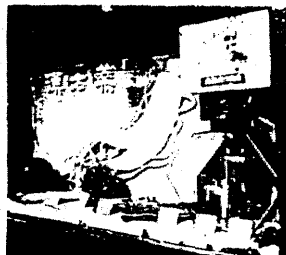
②



③



④



⑤

休み明けに提出されてきた作文の中で、各学生によって取りあげられた観察の場所および対象となった事柄は、次のような結果であった。参考までに各学生の出身国及び専攻科目を添えて、表1として示すものとする。なお、学生の欄の数字は在籍年度(1992ないし1993)、また小文字アルファベットは性別(m=男性、f=女性)を表す。

(表1)

学 生	国籍	専 攻	場 所	内 容
A '92 m	米	国際関係	能登半島輪島	夏祭りの衣装
B '92 f	米	デザイン	京都・北区	リアカーでの野菜の行商
C '92 m	米	日本文化	京都・東山区	清水坂の雑踏
D '93 f	米	国際関係	九州・阿蘇	ホテル, 火山見学の注意
E '93 m	米	日本語	西日本	ヒッチハイクのサイン
F '93 m	米	数学, 日本語	京都・右京区	町内の広報掲示板
G '93 m	米	国際貿易	京都市内	道路標識の色や形
H '92 m	加	国際経営	京都	看板の牛のイラスト
I '92 f	加	737研究	京都	幼稚園児の列
J '93 f	加	邦楽	京都市内各所	店の看板表示
K '93 f	加	日本語	京都駅	駅構内の案内表示
L '92 f	豪	東洋語学	京都・東山区	地主神社の恋占いの石
M '92 f	豪	法学	名古屋ほか	自動販売機
N '93 f	豪	会計学	京, 東京, 広島	看板, 案内板
O '93 f	豪	経済, 経営	京都ほか	案内パンフ, 広告, ロゴ
P '92 f	独	日本史	京都・右京区	ゴミ投棄
Q '92 f	独	日本学	京都・中京区	八百屋の店先
R '93 f	仏	ビジネス	京, 奈良, 富士	各地の標識, 自動販売機
S '93 f	仏	ビジネス	大阪, 金沢	放送局看板, 海岸の標語
T '93 f	仏	国際経営	大阪ほか	都会の過密, 交通標識

※学生C, G, Jは、短期留学プログラム以前に日本滞在経験がある。ちなみにCは高校の英語教師として、GはK S L P参加のため、Jは和楽器(尺八、琴等)習得のため来日。

4. 実践結果の分析

4. 1. 場所別の分析

前項3. 3. において示した表を観察が行われた場所に注目して分類すると、

(6)

各学生の採集例は以下のような地域ごとに分布している（一人で数カ所にわたる例を取り上げている学生がいるため、重複あり）。

京都市内一帯周辺（右京区）；F, N, P

（計18例）大学近辺（北区）；B, I

京都駅（下京区）；K, N

東山区；C, L

中京区；Q, R

その他；G, H, J, O, R, S, T

関東方面—東京都内；N

（計5例）横浜；F

富士山；N, O, R

中部地方—名古屋；M

（計5例）金沢；S, T（Sと行動を共にしていることから推定）

能登付近（含輪島）；A, S

関西方面—大阪；S, T

（計9例）奈良；R

姫路（保安林）；R

広島・宮島；E, N

四国；D

九州（含阿蘇山）；D, E

場所に基づいて分析してみると、やはり、留学生生活の拠点ともなっている国際ハウス（寮）から大学キャンパスの一帯を中心として、京都市内で採集された観察例が圧倒的に多い。それ以外の地域では、夏休みの宿題ということもあって、旅行先やホームステイ先が目立つ。また、フランスの学生は、母国で商業大学に籍を置いているところから、例年夏休み中の3～4週間を実務研修に当てることが必修となっている。そのため、それぞれの研修先での観察をデータに加えている例が特徴的である。

4. 2. 内容別の分析

本項では、各学生が行った観察を内容別に分類し、さらにそれぞれ分類した内容に沿って、より詳しい考察を加えてみたい。まずはじめに、主要な分類項目と、それに該当する観察を行った学生の記号を 3. 3. の表に対応させつつ示しておく（注5）。

- 1) 道路交通標識 ; G, R, S, T
- 2) 旅行先での案内表示 ; D, E*, K, N, O, R, S (*Eは既存のサインではなく自ら作った行き先表示)
- 3) 店・会社の看板 ; H, J, N, S
- 4) 町並み i) 全体 ; C, N, T
ii) 個別 ; F (掲示板), M・R (自販機), Q (八百屋)
- 5) 風俗 (人物中心) ; A, B, I
- 6) 観光 ; C, L, R
- 7) その他 ; O (意味不明のロゴ入りTシャツ), P・S (ゴミ問題)

注5) 一人で複数のテーマに関わる内容を含む観察を行った学生は、以下の通り。

2種類...C, O, T

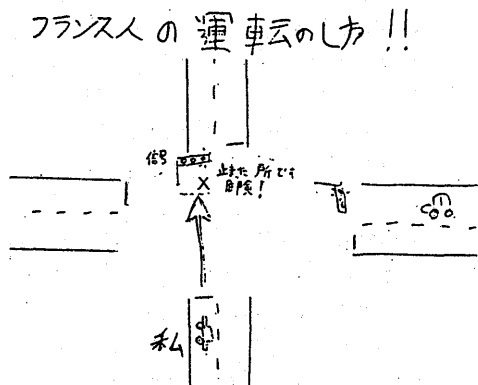
3種類...N

4種類...R, S

以下、上述の内容分類項目に沿って、個々の観察を簡単に紹介した上で、今回の実践に対する分析を添えてゆきたい。

- 1) Gは、交通標識に使われている色彩 (速度表示の青, 「止まれ」の赤, 危険を知らせる黄) や、表示板の形 (円形, 逆三角形, ダイヤ形) に注目している。

S・Tは、レンタカーでフランス人の運転手のし方!! 行動を共にし、それぞれに日仏の交通ルールの違いを指摘している。特に信号の設置位置が、フランスでは車の止まる側に立っているのに対し、日本では停止線の向こう側に設置されているため、日本の交差点で信号の直前まで進入して停車し、危険な思いをした体験が、見取り図とともに書かれている (T提出の上図参照のこと)。



Rは、踏切の「とまれ」「みよ」の標識、横断歩道の「自転車通行可」の文字表示や子供連れの歩行者のシルエット絵表示を取り上げ、説明を加えている。

(8)

2) DはEとともに九州へヒッチハイクし、ホテルに宿泊した折に、洋式トイレの利用方法がわざわざ男女別の絵入りで案内されていたことにとまどいを示す。自身の文化圏では暗黙の事柄に説明を要するというのが、すぐには信じがたく、「笑う事だけ出来ました」と書いている。一方、Eはヒッチハイクのために、自ラ行き先表示を作っては行動した経過を報告(なお、Eの作文には写真の添付なし)。

Kの観察はNの観察と一部重複する。広島旅行のため待ち合わせに利用した駅構内で、案内板の前に植木が置かれていたため、目的の新幹線ホームがなかなか見つからず苦勞した経験から、日本の案内表示の分かりにくさに言及(後掲資料、写真a参照)。

Oは、富士登山の案内パンフレットの英文のスペルや表現の印刷ミスについて指摘。Rは富士山の登頂ルートを示す「登山道」の道しるべのおかげで迷うことなく順路を知ることができたと報告。

Sは日本海の海岸に立てられた「すてないでゴミ」のキャンペーンの呼びかけにもかかわらず、ごみの散乱する浜辺の光景を「さんねんだ」と嘆く(写真b)。

3) Hは、カナダ在住の婚約者の女性が牛好きのため、肉屋の看板に牛のイラストを見つけて、カメラに収めるまでのエピソードを紹介。

Jは、外来語や日本独特の英語表現のある看板を撮り集め、語法のずれやスペルのミスを分析し、「ジャパニーズ・イングリッシュは奇妙な言葉です。」と結んでいる。二、三例を上げれば、喫茶店で「モーニング」を朝御飯の意味で使いメニューの一品として並べていることや、元来軽い食べ物を指す *snack* が単独で「バー」を意味することもある点に、ネイティブ・スピーカーとして違和感を抱いたようである(写真c, d)。

また、スペルの誤りでは、“HOT STAFF”(←Hot Stuff)、“BUTIQUE”(←Boutique)等を採集し、「(日本の店は)看板を作るためにお金を払うのにどうして作る前に使う英語を直してもらわないか」と問題提起、「オシャレだから」と安易に英語を使う傾向に疑問を投げかけている(写真e, f)。

Nは、夏休み中訪れた各地の看板(例えば、広島のOAショールームで見かけた“HUMANICATION PLAZA”という意味不明の造語や、嵐山界隈のタレントショップの壁面に描かれた中指を立てている少女のイラスト)に自国との文化の違いを指摘。

Sは、研修先の放送局の一枚の看板に盛り込まれた情報—テレビ局のチャンネルとラジオ放送の周波数表示、付属施設であるシンフォニー・ホール等への方角を示す矢印について説明する(写真g)。

- 4) i) 街全体の様子をとりえた例として、Cは、みやげもの屋の立ち並ぶ門前の雑然とした雰囲気の中に、寺の静けさとは対比的ながら不思議な調和を見だし、「(一見)調和していない所に日本の特徴があることに気がつく」。

N, Tはいずれも都会の様子を俯瞰して、Nは銀座のビルの屋上に林立する看板の様子を、Tは大阪梅田のスカイビルから見おろした過密な街並を観察している。

ii) 個々の街頭風景を観察した中で、Fは、自分の国では見られない町内掲示板に来日直後から着目し、普段生活している寮の周辺は言うに及ばず、全国各地に同様の掲示板を見つけ、「とても便利だと思」う。さらに町内の案内地図に英語が併記されていれば、「(道に迷った)外国からの旅行者も日本の掲示板が使える」ので役に立つと提案する。

MおよびRは自動販売機を取り上げ、Mは酒について、Rは煙草について、それぞれ未成年者に対し法的規制の行なわれている品物が、自動販売機によって野放しに近い状態で売られている点、自国では考えられないことと驚きを示す。と同時に、そのような「消費者のために便利」(R)な日本の社会を、「魅力的」(M)とも感じている。さらにMは、飲物ばかりでなく、食べ物(ハンバーガー、アイスクリーム等)までも機械で買えることを珍しがる。特に、ハンバーガーのような温かく調理された物の販売機は、自国では見かけないとのこと。ちなみに自動販売機については、鶴見編著『現代風俗通信』においても1980年のはがき報告来扱われており、多田道太郎氏の回想によれば、すでに1970年前後からうどんの自販機なるものが登場していたらしい(376頁-ジ左側)。また、1986年の報告者の一人は、「酒・たばこの自販機を追放せぬ限り、日本人はこの両者に甘過ぎるといわれてもしかたなし。」と書いている(788頁-ジ右側)。

個別の街頭観察例の最後は、八百屋である(作文では、「果物屋」と表現されている)。Qは、祇園祭りの宵山に出かけ、「静かで、ちょっとさびしい」裏通りで、ひっそりと商売を営む昔ながらの八百屋の店頭を観察する。店の看板、品物の並べ方、店先に積み上げられた段ボール箱、冷蔵庫の上に置かれた植物の鉢などに親しみを示す。そして、このような小さい店が「スーパーのためになくならないよう希望する」。

- 5) 旅先で見かけた風俗として、Aはホームステイ先で参加した祭りのために、はっぴ・はちまき姿で過ごした体験を綴る。

Bは、上賀茂あたりからリアカーを引いて野菜の行商に来るおばあさんに感動し、小さな体であえて重労働を続けるのは「どうしてでしょう」と疑問を示す。そして、スーパーで食べ物を買っていると、その入手プロセ

スが「ぜんぜんみえてない」が、「おばあさんを見ながら、昔のことを考える」に至る(写真h)。

Iは大学への通学の途中で幼稚園の子供たちの列に出会い、揃いの制服と帽子を身につけ、男女仲よく手をつないで行く様子を自分の国の子供たちと比べて観察している(写真i)。

- 6) 観光地に関係する場所を取り上げたのは、先に4)で述べたCの他、L(神社の「恋占いの石」の由来に従って、友人と交替で石と石の間をみかくしてたどる一写真j)、R(奈良公園の「鹿せんべい」の露店)の例がある。

- 7) 上に並べた1)～6)のいずれにも分類されないものとして、O(ポスターやバスの乗客のTシャツに見つけたおかしな英文)やP(寮の近くの道端に放置されたバイク・乗用車から環境問題に言及一写真k)がある。Pの例は、本稿では、サンプル数が少なかったため、あえて、その他としたが、Sの海岸のゴミの例(写真b)と共に、自然環境関連として、独立した項目をたてることもできよう。

また、視点を変えれば、

α) 日本人の英語の不自然さを指摘したものとして; D, J, K, N, O

β) 失われつつある古い風景・風俗を取り上げたもの; B, C, Q

γ) 自己の体験をもとにした報告として; A, E, L

といった分類も考えられる。切り口を変えてみることによって、学習者の観察の傾向は多様に分析しうるものとなろう。

5. 結び

最後に、今後への展望を述べてまとめとしたい。

茂呂(1988)は、「なぜ書くのか」という問いに対して、「中間的ではあるが」と断った上で、「われわれはわれわれ自身の声を作るために書くのだ」と結論づけている。そのような答にたどりつく過程で、「読み書き」をひとりで行う作業とみなすのではなく、対話を前提とすることによって意味をもってくるものであると強調している。この点は、言語習得の場において、もっと積極的に意識されるべきところではないだろうか。対話の主体は、ある時は学習者対学習者であり、またある時は学習者対教師となる。そのいずれの組み合わせにおいても、対話の本質一学習者それぞれが「固有の声」を「組み上げること」一は変わらないであろう。

また、本稿のテーマの位置づけに直接関連させて言及すれば、街頭観察を作文の素材として扱うことの利点は、次のようなところに認められよう。

ア) 生活の中で文化に気づかせる。

イ) 観察を通して、“対話”を促す。

ウ) 学習者自らが取材することによって、テーマに親しみが湧く。

今回報告した例は、実践のごく第一段階にすぎないが、さらに効果的な指導法を求めて研究を進め、それを次の実践にフィードバックしていくという手順を根気よく重ねていくことによって、試行錯誤ながら、学習者の“対話”を支えていく裏付けを得ることができるのであろう。

写真 a



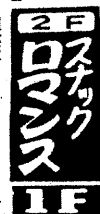
b



c



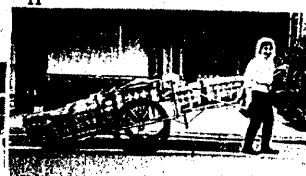
d



e



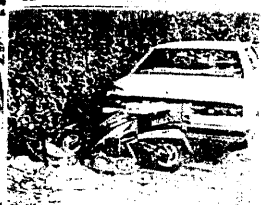
h



j



k



【参考文献】

- Wright, A. (1976) Visual Materials for the Language Teacher, Longman
- Johnson, K. and K. Morrow, eds. (1981) Communication in Classroom, Longman.
- ジョンソン/モロウ 小笠原八重訳(1984)『コミュニケーション・アプローチと英語教育』桐原書店
- Krashen, S. D. and T. D. Terrell (1983) The Natural Approach, Pergamon.
- クラッセン/テレル 藤森和子訳(1986)『ナチュラル・アプローチのすすめ』大修館書店
- Tomalin, B. and S. Stempleski (1993) Cultural Awareness, Oxford University Press
- 佐藤正子 (1984) 「アメリカ人の日本語誤用例の問題点 一初級段階の場合一」『講座日本語教育』第19号早稲田大学語学教育研究所
- 茂呂雄二 (1988) 「なぜ人は書くのか」『認知科学選書16』東京大学出版会
- 渋谷勝己 (1988) 「中間言語研究の現状」『日本語教育』64号
- 遠藤織枝 (1988) 「話しことばと書きことば」『日本語学』vol. 7 3月号
- 岡崎敏雄・岡崎眸 (1990) 『日本語教育におけるコミュニケーション・アプローチ』凡人社
- 岡崎敏雄 (1990) 「日本語教育のティーチャートーク」『広島大学日本語教育学科紀要』創刊号
- 岡崎敏雄・長友和彦 (1991) 「日本語教育におけるティーチャートーク」『広島大学教育学部紀要』第2部39
- 熊取谷哲夫・岡崎敏雄 (1992) 「日本語授業分析一多様化への対応の可能性としてのアプローチ」『広島大学教育学部紀要』第2部40
- 小宮千鶴子 (1991) 「推敲による作文指導の可能性一学習者の能力を生かした訂正一」『日本語教育』75号
- 高橋紘子 (1991) 「Fluency と四技能」『東北大学日本語教育研究論集』6号
- 長友和彦 (1993) 「日本語の中間言語研究一概観一」『日本語教育』81号
- 平澤洋一・渋谷二三男 (1992) 『日本語CAIの研究』桜楓社
- 草薙 裕 (1992) 「日本語教育におけるCAI」『日本語教育』78号〔特集 日本語教育とCAI〕
- 中島和子 (1993) 「パソコン通信を活用した日本語教育一「書く力」を中心に一」『日本語学』vol. 12 12月号〔特集 パソコン通信〕
- 今和次郎・吉田謙吉 (1930) 『モデルノロデオ「考現学」』春陽堂
- 吉田謙吉 (1986) 『考現学の誕生』筑摩書房
- 鶴見俊輔編著 (1987) 『現代風俗通信 ['77~'86] 』学陽書房